

「盆だなー」

2020年8月15日

水中ウォーキング教室 大西 紀夫

亡き妻を思い毎日読経しているが、経文の意味は理解不能。一寸気になる部分をパソコンで調べてみた。「一紙小消息」(いっしこしょうそく)の中に「受けがたき人身をうけて」という文面がある。意味は私が両親から生まれてくる確率は250兆分の1という奇跡的なものらしい。このことをお経に表したのが上記の「受けがたき…」らしい。さて死はどうなんだろう。

話はさかのぼるが、15年前の2005年8月の週刊新潮に私の好きな文章があった。白血病で入院したての頃、四苦八苦していた時、妻が病室に持ってきてくれた週刊誌である。それには患者の心得として「生きている人が死ぬのは当たり前、ゆえに、この当たり前に気がついた患者こそが、本物の患者なのだ」と。要は、生まれて来るのは奇跡的であるが、死ぬのは必然であるということ。病床で、この死は必然であり、当たり前であるという文章を見ることで、死の恐怖に怯えていた私が急に落ち着きを取り戻したのである。

妻の死から307日目に坊さんを迎え、盆棚経を唱えていただき初盆をした。新型コロナウイルスの影響で東京の息子は帰れず、残念であったが、娘たち3人としめやかに供養することが出来た。家の裏からは油蟬がジージーと鳴いていたが、心安らかなひとときであった。

さて、不思議で嘘のような本当の話を。自然現象かもしれぬが、私の心に響いた出来ごとであった。

<其の一>

8月15日、盆のため、普通より一段と心を込めてお経を唱えた。2冊の経本を読むのに1時間はかかったと思う。さて、その晩、入浴した時である。髪を洗っていると、突然、頭の上から油蟬の音が、本当にすぐそこにおるのではないかと思うぐらいに大きく鳴り響いた。あれ…と思い風呂の上を見渡したが油蟬はいない。音も消えた。盆なので妻が戻り蟬の声に変えて私に語りかけたのでは……なにかその様な気配を感じた。

<其の二>

これは2005年、15年前に私が白血病で入院したての頃である。高熱で、まるで寝られず、咳もひどく出るので寝てみたり起きたりしていた。まさにもがき苦しんでいた時のことである。たまたまベッドに横たわっていたが、それを上から見ている自分がいた。冷静な別人格の私が私を見ていたのである。どうも幽体離脱現象が起きていたようである。あとから調べてみたら体外離脱という説の方が強いと思えた。人間、生きていれば、それぞれの人に、いろいろの経験があろうが、私は寂しい時、苦しい時に不思議な経験をするようである。

今は、スポーツクラブNAPで水中ウォーキング教室に精を出して楽しんでいるが、心と身体の充足度を満たすためには最高にいい運動だと思う。水中ウォーキングに感謝・感謝。少しづつ寂しさから抜け出し、子供たちも安心するように！！